

学校法人軽井沢風越学園 事業報告 (2024年度)

1. 事業概要(2024年度)	3
2. 決算	4
3. 教育活動	10
<3.1 2024年度のカリキュラムの重点>	10
<3.2 カリキュラムの概要>	10
4. 重点施策	17
<4.1 寄付募集>	17
<4.2 人事制度>	18
<4.2.1 採用>	18
<4.2.2 制度構築>	19
<4.2.3 スタッフの育成>	19
5. 通常事業	20
<5.1 募集・授業料等減免制度>	20
<5.1.1 募集>	20
<5.1.2 授業料等減免制度>	21
<5.2 軽井沢風越ラーニングセンター>	22
<5.3 森と循環する環境づくり>	23
<5.4 保護者コミュニティ>	23
<5.5 企業との連携>	25
6. 運営	26
<6.1 財務・会計・経理>	26
<6.2 人事・労務>	26
<6.3 施設・設備>	26
<6.4 総務・法務>	26
<6.5 校務>	27
<6.6 広報>	27
<6.7 情報システム>	27
<6.8 渉外>	27
参考資料	28
<大切にしたいこと>	28
<法人概要>	29
<教職員組織>	29
<在籍数>	30
<在籍数の推移>	31
<施設>	32
<2024年度学校評価 結果概要>	34

1. 事業概要(2024年度)

開校5年目となった2024年度は、中期目標として掲げている「2028年度に実現したい子どもの姿・スタッフの姿」の折り返し地点を過ぎ、これまでの取り組みの成果と課題の両面が見えてきた一年であった。

幼小中12年間をつなぐカリキュラムは、＜身体性＞＜当事者性＞＜カリキュラム＞の3つの視点を軸に、実践をふりかえり、よりよくしていく動きも定着しつつある。「大切にしたいこと」が浸透しつつあることに加えて、軽井沢風越学園のリズムやサイクルに、子どもも大人も身体が馴染み、先の見通しがつくようになったことで、日々の活動が安定的に運営できるようになってきている。カリキュラム面では、特に「異年齢」と「探究」の実践が広がりと深みを増しつつあり、スタッフも手応えを感じ始めている。また土台の学び(教科の学び)においても、スタッフの真摯な授業づくりの積み重ねにより質的に高まってきている。

財務基盤の安定化は、2024年度も大きく進展していない。10%の授業料等の値上げは計画通りに実施したが、その効果は約1,900万円／年と軽微であった。また、寄付金と視察研修事業による収入は大きく増加することはなく、応募者数の減により入園入学検定料も減少した。一方で、定期昇給や賞与支給額の増により人件費は増額となったため、全体的な収支は2023年度よりも悪化した。2025年度以降の財務改善に向けて、2024年度は①寄付の裾野を広げる施策 ②遊休地の売却の検討と具遺体的な動きを始め、2025年度の事業計画に盛り込んだ。

人事面では、組織として目指す姿を改めて確認し、人財マネジメント方針を検討するところからマネジメントチームでスタートした。スタッフが成長や成果を感じられる機会や仕組みを中心に、人事制度全般の構築のためのディスカッションを積み重ねている。検討したものを2025年度中に取りまとめ、2026年度から実施できるようにプロジェクトを進行した。

2024年度に明確になった成果と課題を踏まえて、今後の事業を推進していきたい。

大切にしたいこと
1. 子どもも大人も、つくり手である 2. 「 」になる。 3. 大人も学び続ける
2028年度に実現したい子どもの姿
4. 9年生の1人ひとりが、風越のリソースを十分に活用し、他者と協同しながら、自分の学びをつくっている。 5. 年少から8年生の1人ひとりが、12学年のつながりを持ち、「100%わたしをつくる」に向かって学んでいる。
2028年度に実現したいスタッフの姿
1. スタッフの1人ひとりが、風越のリソースを十分に活用し、他者と協同しながら、子どもたちの学びに関わっている。 2. 1人のスタッフが12学年の子どもたちに関わっている。全スタッフで1人の子どもに関わっている。

2. 決算

【資金収支計算書の概要】

(単位:円)

		予算	決算	差額
収入の部		705,529,496	777,349,660	▲71,820,164
	学生生徒等納付金	232,055,000	232,886,000	▲831,000
	手数料	2,200,000	2,600,000	▲400,000
	寄付金	78,000,000	127,899,299	▲49,899,299
	補助金	104,858,000	129,869,000	▲25,011,000
	付随事業収入	4,987,000	6,350,300	▲1,363,300
	受取利息・配当金収入	0	19	▲19
	雑収入	10,000,000	14,499,316	▲4,499,316
	前受金収入	7,000,000	6,950,000	50,000
	その他の収入	88,000,000	68,991,707	19,008,293
	資金収入調整勘定	▲17,650,000	▲8,775,477	▲8,874,523
	前年度繰越支払資金	196,079,496	196,079,496	—
支出の部		705,529,496	777,349,660	▲71,820,164
	人件費支出	303,549,000	301,775,438	1,773,562
	教育研究経費支出	89,877,000	83,515,108	6,361,892
	管理経費支出	49,888,000	44,714,018	5,173,982
	施設関係支出	220,000	220,000	0
	設備関係支出	3,779,000	3,752,228	26,772
	資産運用支出	13,400,000	13,400,000	0
	その他の支出	92,000,000	103,480,784	▲11,480,784
	(予備費) ¹	(1,059,000) 3,941,000	—	3,941,000
	資金支出調整勘定	▲34,000,000	▲33,873,914	▲126,086
	翌年度繰越支払資金	182,875,496	260,365,998	▲77,490,502

¹ 予備費: 当初予算5,000,000円 - 使用額1,059,000円 = 3,941,000円
(使用額内訳は2024年度計算書類を参照)

【事業活動収支計算書の概要】

(単位:円)

		予算	決算	差額
教育活動収入		429,100,000	513,415,886	▲84,315,886
	学生生徒等納付金	232,055,000	232,886,000	▲831,000
	手数料	2,200,000	2,600,000	▲400,000
	寄付金 ²	75,000,000	127,211,270	▲52,211,270
	経常費等補助金 ³	104,858,000	129,869,000	▲25,011,000
	付随事業収入	4,987,000	6,350,300	▲1,363,300
	雑収入	10,000,000	14,499,316	▲4,499,316
教育活動支出		558,414,000	544,883,673	13,530,327
	人件費	303,549,000	301,775,438	1,773,562
	教育研究経費	204,377,000	197,986,770	6,390,230
	管理経費	50,488,000	45,121,465	5,366,535
教育活動収支差額 ⁴		▲129,314,000	▲31,467,787	▲97,846,213

【事業活動収支計算書に関する補足説明】

1) 収入

- 主な増加要因
 - 寄付金の増加
 - 予算費約5,200万円の増収。個人の多額の寄付があった。アドベンチャープログラムや森と循環する環境づくりなど、使途指定の寄付が微増した。
 - 経常費等補助金の増加
 - 予算比約2,500万円の増収。特に学校法人補助金(幼稚園分)は取り組みに応じて配分されるが、2023年度に引き続き予想を上回る配分となった。定員充足率の向上とともに、加算対象となる取り組みも充実させていく。
 - 雑収入の増加
 - 予算比約450万円の増収。主に、視察研修・企業研修で約300万円、講演会・実践ラボで約150万円の増加となった。

2) 支出

- 施設関係、設備関係構築物について、予備費1,059,000円を充当することで予算内に収まった。

² 資金収支計算書と事業活動収支計算書の「寄付金」に差異があるのは、事業活動収支計算書で「現物寄付」123,971円、「特別収支 - 施設設備寄付金」に812,000円が計上されているため。

³ うち、私立学校振興助成法に基づく助成額: 幼稚園23,517,000円、義務教育学校84,801,000円

⁴ 「減価償却額」は事業活動収支計算書の「教育研究経費」と「管理経費」に計上されている。

3) 収支改善策について

- 改善策①: 定員充足率の向上⁵
- 改善策②: 寄付募集の強化と活用⁶
- 改善策③: 付随事業・収益事業収入および雑収入の増加⁷

(表) <参考> 重要KPI: 「補正人件費依存率」「人件費依存率」「人件費比率」

	2024 年度 (予算)	2024 年度 (実績)	2025 年度 (予算)	目標	中学 法人 平均 ⁸	小学 法人 平均 ⁹
補正人件費依存率(%) (人件費÷(学生生徒等納付金 + 県・町補助金)) ¹⁰	98.6	83.2	89.7	80.0	70.0	72.4
人件費依存率(%) (人件費÷学生生徒等納付金)	138.3	129.6	123.2	100.0	101.8	102.1
人件費比率(%) (人件費÷教育活動収入 ¹¹)	74.1	58.8	66.8	60.0	63.2	62.9

(表) <参考> 定員充足率100%時の学生生徒等納付金と補助金¹²

	幼稚園	義務教育学校
入園・入学金	10万円	20万円
保育料・授業料	58.8万円／年	66万円／年
施設料	11万円／年	11万円／年
教育・活動料	2.4万円／年	3万円／年
補助金	19万円／年・人	32万円／年・人

- 幼稚園が定員(72名)を満たした場合
 $68,064千円 = 10万円 \times 24人 + (58.8万円 + 11万円 + 2.4万円 + 19万円) \times 72人$
 - 義務教育学校が定員(315名)を満たした場合
 $359,800千円 = 20万円 \times 35人 + (66万円 + 11万円 + 3万円 + 32万円) \times 315人$
 - 幼稚園、義務教育学校どちらも定員を満たした場合
 $427,864千円 = 68,064千円 + 359,800千円$
- ※以上の収入には、授業料等減免制度等の減収額は反映していない。

⁵ 「3.3 在籍数の推移」参照

⁶ 「4.1 寄付募集」参照

⁷ 「5.5 企業との連携」参照

⁸ 令和5年度版「今日の私学財政」より

⁹ 同上

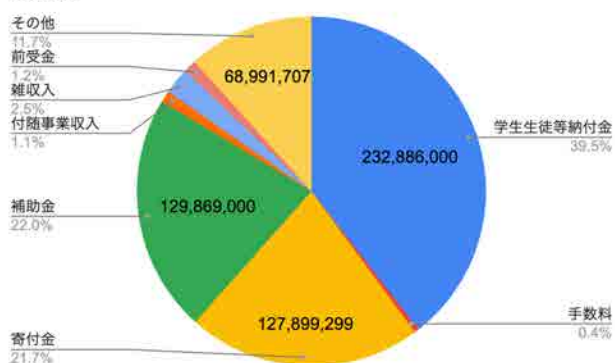
¹⁰ 風越学園は、市町村補助金(ふるさと納税)を除いた経常費等補助金で算出

¹¹ 教育活動収入＝寄付金+事業収入を含む

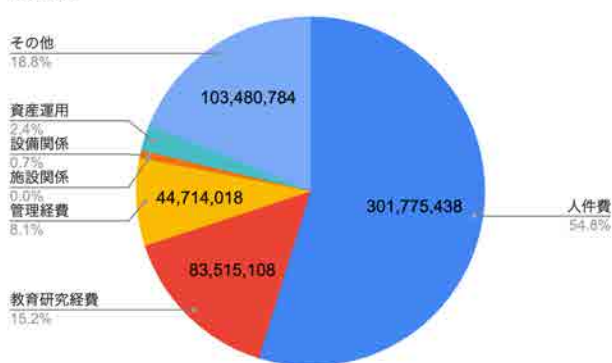
¹² 2025年3月31日時点

<参考>

資金収支計算書（収入構成） ※資金収入調整勘定を除く
単位：円



資金収支計算書（支出構成） ※資金支出調整勘定を除く
単位：円



事業活動収支計算書_教育活動収入
(予実比較)

単位：円

■ 学生生徒等納付金 ■ 手数料 ■ 寄付金 ■ 補助金
■ 付随事業・収益事業 ■ 雑収入



事業活動収支計算書_教育活動支出
(予実比較)

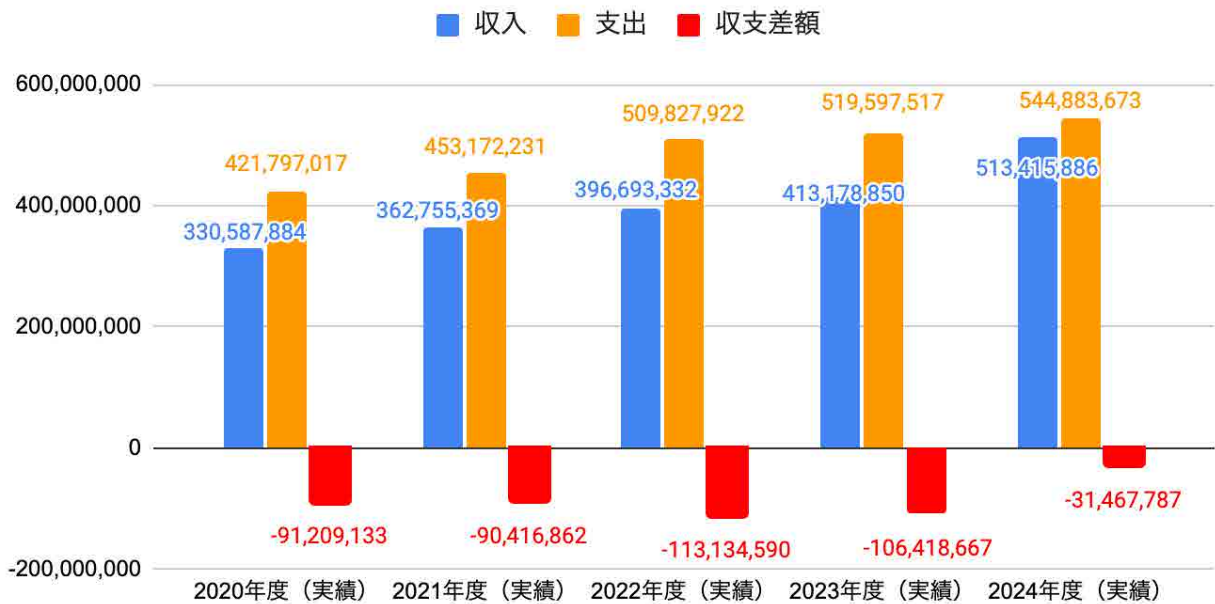
単位：円

■ 人件費 ■ 教育研究経費 ■ 管理経費



事業活動収支計算書 教育活動収支の年度推移
(2020年度～2024年度)

単位：円



事業活動収支計算書 教育活動収支の年度推移

(単位：円)

	2020年度 (実績)	2021年度 (実績)	2022年度 (実績)	2023年度 (実績)	2024年度 (実績)
収入	330,587,884	362,755,369	396,693,332	413,178,850	513,415,886
支出	421,797,017	453,172,231	509,827,922	519,597,517	544,883,673
収支差額	-91,209,133	-90,416,862	-113,134,590	-106,418,667	-31,467,787

＜参考＞学校会計と企業会計

学校会計	企業会計
貸借対照表	貸借対照表
事業活動収支計算書	損益計算書
資金収支計算書	キャッシュフロー計算書

貸借対照表		事業活動収支計算書		資金収支計算書																																																							
<table><tr><th>資産の部</th><th>負債の部</th></tr><tr><td rowspan="5">固定資産 有形固定資産 土地 建物 教育研究用機器 管理用機器 特定資産</td><td>固定負債</td></tr><tr><td rowspan="3">流動負債 未払金 前受金 預り金</td></tr><tr><td rowspan="2">純資産の部</td></tr><tr><td>基本金(1～4号)</td></tr><tr><td>繰越収支差額</td></tr><tr><td>流動資産</td><td></td></tr><tr><td>現金</td><td></td></tr></table>		資産の部	負債の部	固定資産 有形固定資産 土地 建物 教育研究用機器 管理用機器 特定資産	固定負債	流動負債 未払金 前受金 預り金	純資産の部	基本金(1～4号)	繰越収支差額	流動資産		現金		<table><tr><td rowspan="10">経常収支</td><td>教育活動収支</td><td>教育活動収入</td></tr><tr><td></td><td>教育活動支出</td></tr><tr><td></td><td>教育活動収支差額</td></tr><tr><td>教育活動外収支</td><td>教育活動外収入</td></tr><tr><td></td><td>教育活動外支出</td></tr><tr><td></td><td>教育活動外収支差額</td></tr><tr><td></td><td>経常収支差額</td></tr><tr><td>特別収支</td><td>特別活動収入</td></tr><tr><td></td><td>特別活動支出</td></tr><tr><td></td><td>特別収支差額</td></tr><tr><td colspan="2">基本金組入前当年度収支差額</td></tr><tr><td colspan="2"></td></tr><tr><td colspan="2">基本金組入額</td></tr><tr><td colspan="2"></td></tr><tr><td colspan="2">当年度収支差額</td></tr><tr><td colspan="2"></td></tr><tr><td colspan="2">前年度繰越収支差額</td></tr><tr><td colspan="2"></td></tr><tr><td colspan="2">翌年度繰越収支差額</td></tr></table>		経常収支	教育活動収支	教育活動収入		教育活動支出		教育活動収支差額	教育活動外収支	教育活動外収入		教育活動外支出		教育活動外収支差額		経常収支差額	特別収支	特別活動収入		特別活動支出		特別収支差額	基本金組入前当年度収支差額				基本金組入額				当年度収支差額				前年度繰越収支差額				翌年度繰越収支差額		<table><tr><td>収入の部</td></tr><tr><td>支出の部</td></tr><tr><td>翌年度繰越資金 (現預金残高)</td></tr></table>		収入の部	支出の部	翌年度繰越資金 (現預金残高)
資産の部	負債の部																																																										
固定資産 有形固定資産 土地 建物 教育研究用機器 管理用機器 特定資産	固定負債																																																										
	流動負債 未払金 前受金 預り金																																																										
		純資産の部																																																									
			基本金(1～4号)																																																								
	繰越収支差額																																																										
流動資産																																																											
現金																																																											
経常収支	教育活動収支	教育活動収入																																																									
		教育活動支出																																																									
		教育活動収支差額																																																									
	教育活動外収支	教育活動外収入																																																									
		教育活動外支出																																																									
		教育活動外収支差額																																																									
		経常収支差額																																																									
	特別収支	特別活動収入																																																									
		特別活動支出																																																									
		特別収支差額																																																									
基本金組入前当年度収支差額																																																											
基本金組入額																																																											
当年度収支差額																																																											
前年度繰越収支差額																																																											
翌年度繰越収支差額																																																											
収入の部																																																											
支出の部																																																											
翌年度繰越資金 (現預金残高)																																																											

3. 教育活動

<3.1 2024年度のカリキュラムの重点>

軽井沢風越学園ではカリキュラムを「子どもの経験の総体」と捉える。子どもは授業等の意図された時間の中だけで学んでいるわけではない。例えば、森やライブラリー、ラボなどの環境、活動によって変化する集団、異年齢の子ども同士の関係や日々のスタッフの関わり、昼休み時間でのあそびもカリキュラムである。

「2028年100%わたしをつくる」を目指して、2024年度は「コミュニティ」と「12年間つながるカリキュラムづくり」に注力してきた。

1. コミュニティ

- コミュニティは、カリキュラムを深める中で見えてきた大切にしたい3つの視点（身体性、当事者性、コミュニティ）の中の1つである。
- 幼稚園から9年生まで学年を超えた出会いや共通体験の機会をつくる。具体的にはホームの日を活用した探検など、好きなことで出会う時間を積み重ねていく。
- 1～4年生のホームを4月からスタートし、コミュニティの充実と共に、1～9年生のラーニンググループを超えた実践やスタッフの協働に挑戦する。
- ホームとかざこしミーティングとの連携を図り、子どもたちの学校づくりへの参画へとつなげていく。

2. 12年間つながるカリキュラム

- 幼児期の、一人ひとりの表現が大事にされる経験をとおして生まれてくる探究の芽が、1年生からのプロジェクトへと発展していく。義務教育学校のプロジェクトでは、「広げる」「深める」スタッフの関わり、個の学びの見とりの質を上げることを目指す。
- 土台の学びでは、教科間でのつながりを意識し「自分で学ぶ力」を育む実践に挑戦する。
- 評価を「一人ひとりの学びの軌跡を蓄積し、共に価値づけるプロセス」と位置づけ、発達段階や教科の特性に合った形式で、スタッフ間で共有しながら子どもの記録を12年分の専用ファイルに蓄積し活用する。

<3.2 カリキュラムの概要>

①ホーム

1. 2024年度の取り組み

- a. 子どもたちは、異年齢構成の「ホーム」に所属し、一日の始まりと終わりの時間を共に過ごす。2024年度は、1～4年生のホームは2023年度からメンバーを替えず継続、5～9年生のホームはメンバーの入れ替えを行った。3歳から15歳までが5つのホームをつくり、その中で幼児、1～4年生、5～9年生の3つに分かれる。時期や活動にあわせて、その中で様々な小グループをつくりながら過ごす。
- b. 異年齢で過ごすことを通して、自分の視線とは違う世界を見たり、真似したり、試したりしながら、新しい世界をともにつくる。あそびや学びに没頭するには、自分の存在が大切にされていると感じられる安心の場が必要である。
- c. ホームでは「聴きあう」と「多様さを認めあう」ことを大切に、子どもたち自身で安心の場をつくっていく。朝や帰りのつどいでは、悩みを相談しあったり、一緒に遊んで楽しんだり、嬉しいことをお祝いしたりする。

2. 成果と課題

- a. 異年齢ホームの活性化や子どもの参画
 - i. 年間8回、終日ホームのメンバーで過ごす「ホームの日」を設定した。これによりホームでさまざまな活動が生まれ、コミュニケーションも活発になった。子ども主導で計画されたスポーツフェスティバルや、ミュージックフェスティバルなどもホームの日に行われた。
- b. ホームの活用
 - i. 全校ミーティングである「かざこしミーティング」をホームごとに計画し、多くの子どもたちに活躍の機会が生まれた。
 - ii. マイプロジェクトでは、チェックインとチェックアウトをホームで行ったり、アウトプット日の振り返りをホームで行ったりすることで、異年齢でお互いのプロジェクトに関心を持ち合う関係が少しずつ生まれた。
 - iii. ホームプロジェクトの実施、ホームについて考える時間
 - iv. 2024年度はホームの時間を拡張し、朝45分確保することとなった(1週間に授業1コマ分×4回)。時間が長くなることで、ホームの中でプロジェクトを立ち上げたり、自分たちのホームについて考える時間をつくるホームもあった。今後も異年齢のホームの可能性をより追求していきたい。
- c. かざこしミーティングとの連携
 - i. ホームで日常的に、困りごとやこうなったらいいなという一人ひとりの声がやりとりされる状態にはまだなっていない。それぞれの困りごとや願い、また風越学園全体に関わることやホームを超えて考えたいことが、月に1度のかざこしミーティングに持ち寄られ、みんなで考えていく流れをつくりたい。

②かざこしミーティング

1. 2024年度の取り組み
 - a. ホームとかざこしミーティングとの連携を図り、子どもたちの学校づくりへの参画へとつなげていく。具体的には、これまで中心メンバーのみで運営してきたかざこしミーティングの運営を、5～9年生のホームごとに行うこととし、中心メンバーはそのサポートをする運営体制とした(2024年度は8回のかざこしミーティングを行い、最初の2回と最後の1回以外の5回を各ホームで運営した)。
2. 成果と課題
 - a. ホームごとにかざこしミーティングを担当することで、多くの人が「風越学園の1～9年生全員が集まる場をどうつくとよいか」を真剣に考え意見を交わす様子がみられ、当事者性が増してきている。その変化は、かざこしミーティングへの参加する態度にも現れてきている。
 - b. 自分からは積極的に前に立つことは少なかった子も、かざこしミーティングという外から与えられた役割の中で、前に立って説明することにチャレンジするなど、ホームの中の個々人に、それぞれのチャレンジがあった。
 - c. 1～9年生が集まる場においては、楽しむことを重視するあまり、アイスブレイク的なあそびの時間を長く取りがちとなり、「風越学園をよりよくするための話し合い」に充てられる時間が相対的に短くなった。
 - d. ホームごとの担当になったことで解釈が多様化し、「そもそもかざこしミーティングはどういう場なのか」の軸が弱くなった。次年度は、かざこしミーティングは何のための場なのかを整理し、子どもたちと育てていきたい。

③カリキュラムの12年のつながり

幼稚園から9年生まで学年を超えた出会いや共通体験の機会をつくる。具体的にはホームの日を活用した探検など、好きなことで出会う時間を積み重ねていく。

1. くらしとあそび(幼稚園)

a. 2024年度の取り組み

i. 活動フィールドを森へ

1. 森と校舎の間にあった活動フィールドを2024年度に森に移すことを決めた。年長児は森の中に子どもたちが自分の手で拠点をつくっていくプロセスが生まれたことや、自然素材に恵まれた環境の中でたっぷり遊びこむ姿がこれまで以上に見えたことは収穫であった。

ii. みんなでみんなをみる保育へ

1. 2023年度の学年グループの凝集性の高さを緩和し、保育者みんなで子どもみんなを見ていく保育を願って、学年グループごとの集いから全園児での朝の集いへ切り替え、秋まで継続したことで、コミュニティへの感度が広がり、学年グループを超えた遊びや関わりが増えていった。またスタッフも秋以降にグループを変更する幼稚園内留学的な動きを実施することで、グループ外の子どもたちへの理解を深めることができた。
2. みんなの集いから異年齢グループでの探検を週1回実施したこと、田んぼ活動を異年齢グループで実施するなど、異年齢での活動を意識したグループ構成とした。関心で繋がり、学年グループを超えた仲間に出会うことが増えた。

iii. 12年間のつながり

1. ホームの活動は毎週金曜日に義務教育学校と同じ5グループに分かれ、掃除や料理など暮らしをつくる活動でつながるグループとして活動を展開した。年間通して、義務教育学校のホームとつながった活動は実現できなかった。
2. マイプロで野外で活動している中学生のグループが、幼稚園の集いに何度も参加して継続した関わりが生まれた。具体的には、川の整備や花の植え込み、動物のお世話など、幼稚園の子どもたちの生活に関わる活動を一緒に行った。

b. 成果と課題

- i. 活動フィールドを森へ移し、自然の中での子どもの育ちに向かう取り組みがこれまで以上に深まった1年となった。同時に、庭で活動していた時に起きていた義務教育学校の子どもたちとの偶然の出会いが減少した。今後は12年のつながりを感じられる共通の活動を展開していくなど、一層の創意工夫が必要である。
- ii. 学年グループだけに関係性が閉じないための工夫を集いの構成や毎週の活動などを通じて行ってきたことで、学年グループを超えた遊びのひろがり生まれた。保育者の実感をもとに、学年ごとの動きと全体の動きとを年間通じて見据えながら、グループ構成のあり方を工夫していきたい。

2. テーマプロジェクト

a. 2024年度の取り組み(1～4年生プロジェクト)

- i. 開校から4年間、幼稚園から1・2年生のつながりを模索してきた。幼稚園を巣立って一年生になることに期待や希望に溢れている子どもたちにとって、「これまで通り、野外でのくらしを大切にしよう。」だけでは、そのエネルギーを抑え込むことになってしまうのではないかという思いもあった。そのため、自然の中で五

感を使いながら自分たちのくらしをつくっていくことはそのままに、小学校の学習内容としっかり結びつけたカリキュラムを作ることにチャレンジした。

- ii. 2024年度は、1年生は外部からの進学の子どももいることから、まずは1年生のコミュニティが安心安全の場となるよう5月いっぱい1年生のみで過ごした。
 - iii. 2・3・4年生は、4月から7月まで、「めぐりめぐる」「いきものぐらし」「とってみよう！」という3グループで活動に取り組んだ。グループが子どもの希望をベースに調整した。6月からは、3グループに1年生も加わって活動した。
- b. 2024年度の取り組み(5～9年生テーマプロジェクト)
- i. 5・6年生「わたしの手仕事」「わたしとあなたでつくる音」「パロディ演劇～あなたのこだわりは？～」「YOUは何しに軽井沢へ？」「しよつたんわたしのかたち」
 - ii. 7・8年生「火でひろがる世界」「ギリギリエキスポ/ドキドキロボコン」「風越万博」「ゆるビーイング」「色と形でひろげる世界」
 - iii. 9年生「卒業探究(そつたん)」
- c. 成果と課題
- i. どのグループでも4年生がリーダーシップを発揮し、3年生以下の子たちの思いを聞いた上で活動を進める姿が見られた。また、1・2年生だけの活動などもグループ内で意図的に作ることで、2年生が1年生をケアする姿もあった。一方で、アウトプットに向けた活動では、言語が優位になることも多く、1年生にとってはハードルが高すぎたという課題があった。また、教科の学びとの関連を十分に図ることができなかったという課題もあり、次年度に向けて検討が必要である。自然の中で五感を使いながら、1～4年生というある程度幅のある異年齢構成で、じっくり、たっぷり混ざり合って豊かな活動やかかわり合いが生まれたことは確かである。課題をどうクリアしていくか検討の余地はあるが、来年度もこのチャレンジを続ける意味は十分ありそうである。
 - ii. 5～8年生では教科横断をして意識したプロジェクトやその枠組にとらわれない子どもの表現を大切にしたいプロジェクトが実践された。そのことで、①テーマ×教科横断プロジェクトと②テーマ×単独の教科のプロジェクトの良さと課題が見えてきた。①の場合は子どもの実態に適した材から授業をつくる難しさが見え、②の場合はこどもが深く追求したり、道筋(目標)がはっきりしていることで取り組みやすさがあったりする。一方で、「プロジェクト」という不確定な目標設定の中で子どもたちのダイナミックな躍動が生まれるようなおもしろさが微減しているようにも感じられる。小学校高学年、中学生(後期課程)期の子どもたちに適した学習材、期間、グループサイズを工夫することが必要そうである。
 - iii. 9年生の卒業探究(そつたん)は3年目の実践を終えて、確かな手応えを感じられるようになった。子どもたちが自ら問う対象に向かうだけでなく、自分自身とは何であるのかという輪郭を描き続けるような実践であった。その結果、子どもたちはテーマに対する追求の度合いはそれぞれであっても、達成感を得られた様子が見られたほか、互いの健闘を称え合う姿が見られた。形式に囚われ過ぎることのない卒業探究のあり方を次年度も継続して探究していく。

3. マイプロジェクト

a. 2024年度の取り組み

- i. 1～9年生は、週に4時間(毎週水曜日)、「マイプロジェクト(以下、マイプロ)」に取り組んだ。マイプロの定義は以下の通りである。
- ii. 子どもの『やってみたい、知りたい、解明したい』という情熱をプロジェクトの推進力とする。
- iii. 自分のテーマを深め、広げていく中で、自分自身を探究する。

- iv. 自分のプロジェクトに没頭したり、目的に向かって計画・実行・振り返りをしたりすることを通して、自分のプロジェクトを自分でつくる手応えを感じる。
- v. 仲間と協力してプロジェクトを進めたり、他のプロジェクトの仲間と交流したりすることで、自分の世界が広がっていくことを経験する。
- vi. マイプロノートを活用し、プロジェクトの記録や振り返りを残したり、交流のきっかけにしたりする。

b. 成果と課題

- i. 「マイプロで大切にしたいこと654」(6つの視点・5つのアウトプットの場合、4つのリソース)を設定し、子ども自身がプロジェクトに活かすと共にスタッフの伴走の視点とした。
- ii. スタッフの伴走の方法として「エリア」と「プログラム」を設定することで、一人ひとりの役割が明確化した。
- iii. エリア:「理科室」「工房」など活動場所。そこにやってくる子どもたちのやってみようプロジェクトに(複数)伴走する。
- iv. プログラム:スタッフが提案する場合。やってきた子どもたちと共にプロジェクトをつくり、伴走する。
- v. 子どもやスタッフがマイプロについて相談できる「マイプロカウンター」を常設した。「やりたいプロジェクトが見つからない」「どのエリアに行ったらいいかわからない」などの相談ごとに対応。デバイスの貸し出しやマイプロ助成金の申請・アウトプット日のエントリーなども担った。全体を見る人が置かれたことで、スタッフの調整などを行うことができた。
- vi. 毎回のチェックイン・ふりかえりをホームで行った。異なるプロジェクトの子どもたちが交流するきっかけにはなったが、ホームごとに実態も異なり、ノートの共有に止まるなど、課題もあった。
- vii. 2023年度試験的に運用していた「マイプロファイル」を、使用状況を鑑み内容を再編し、ノートの形にした。一冊のノートであることで、1年間の活動の記録が残りやすくなり、タームごとや年間といった長期間での活動や自分自身の振り返りを行うことができた。
- viii. スタッフ同士の共有や振り返りの場を年間を通じて設定することが難しかった。次年度の課題である

4. 土台の学び

a. 2024年度の取り組み

- i. 学びランチとして土台の教科性、12年のつながりを深めていく一年とした。隔週で土台の学びランチごとに集まり、実践の持ち寄り、悩みや課題の相談、専門性についての学びを深める時間をとった。年間計画を立て、見通しを持った土台の学びの実践を行い、年度はじめ、年度途中、年度末に保護者への学習の計画を共有し、学園のカリキュラムへの理解を計る。

b. 成果と課題

- i. 2024年度は、土台メンバーの多いランチでは教科の専門性について考え深める時間となったのが成果としてあげられる。一方で、一人で担当している教科については、どう学び合っていけるかが課題である。
- ii. 年間計画を立て、子どもや保護者と共有することで、保護者の理解を得ることや、コミュニケーションのきっかけとなった。スタッフとしても、実践を振り返り、計画に繋げる良い機会となった。さらに改善する点としては、土台の学びだけの計画を考えるのではなく、テーマプロジェクトのつながりやマイプロジェクトへの広がり意識して土台の学びを設計していくことが必要である。

- iii. これまで、義務教育学校の後期課程に関しては学年ごとに土台の学びを実践してきたが、風越学園の異年齢コミュニティを生かした実践にも次年度チャレンジしていく予定である。

④記録と評価(みらつくファイル)

1. 2024年度の取り組み(みらつくファイル)

- a. 2024年度は、風越学園が考える記録と評価を、「一人ひとりの学びの軌跡を蓄積し、共に価値づけるプロセス」と定義し、「みらいをつくるファイル」を作成した。記録は、子どもに関わるスタッフはもちろん、子ども自身が自分の学びの軌跡を蓄積していくものである。共に価値づけるプロセスを通して、子ども自身が、自分自身の学びを自己評価できるようになっていくことを目指してスタートした。
 - i. 日々の記録と評価のつながり
一人ひとりの学びの軌跡を蓄積し、共に価値づけていくために、計画に基づく記録と評価のつながりについて、以下のように大きく3つに分けて考えた。
 - 1. 「年間学習計画・大切にしたいこと」(活動前の計画)
 - 2. 「日々の記録」(活動中の記録)
 - 3. 「まとめりごとの総括的評価」(活動後の評価)
 - ii. 以上の3つについて学年や教科ごとの特質にあわせて、記録と評価の方法を柔軟に考えた。また、その他の学習活動の子ども一人ひとりの姿に関する記録についても、スタッフ各自で活動や子どもに合ったかたちで残し、スタッフ間で共有しながら、日々の子どもの関わりに活かすことを目指した。
 - iii. 記録・評価したことを、年度末に「みらいをつくるファイル」として整理して、製本を年少～9年生まで全家庭に持ち帰り、家庭から子どもへのメッセージを書いてもらったものを学園で保管した。
 - iv. 幼稚園では、学期ごとの子ども一人ひとりの象徴的な姿を伝える写真とエピソードを3セットと1年間の育ちを1,500字程度でまとめた「育ちの記録」をみらつくファイルにまとめた。今後も、子ども自身が成長し見返した際に、自分自身の姿が見えてくる記録のあり方を目指していく。

2. 2024年度の取り組み(わたしアウトプットデイ)

- a. 2023年度に続いて、年間2回の「自分プレゼン」のうち2回目(3月)を「わたしアウトプットデイ」とした。「わたしアウトプットデイ」とは、プレゼンというイメージにこだわらず、自分なりにわたしを表現する・伝える場であり、これまでのようにスタッフと保護者のみならず、個人の選択によって他の子どもたちや保護者の前で行うこととした。
 - i. この時間で大切にしたいことを以下の通り共有した。
 - 1. わたしのここまでの経験、学びを全力でアウトプットする
 - 2. 保護者や仲間といっしょに、他者の「わたしアウトプット」を喜び、お祝いする
 - 3. ラーニンググループごとに発表スタイルを考えて子どもたちが運営する。

3. 成果と課題

- a. 2年目は「わたしアウトプット」(2月)の準備として、スタッフは記録休みを設けて子どもと共に価値づけるプロセスになるように取り組んだ。まだラーニンググループ間や、土台の学び、各プロジェクト間における記録と評価のかたちには一貫性が欠けていたり、ばらつきが見られたりする。
- b. 上記の大切にしたいことを体現する場となった。特に9年生は、お互いの成長を見届けあって卒業を迎えられる場となったが2日間開催(7時間)となったため1つの枠の時間帯が長すぎて間延びしてしまった。

4. 重点施策

＜4.1 寄付募集＞

- 計算書類上の寄付額は約1億2,770万円であるが、ふるさと納税を含めた実質的な寄付総額は約1億5,370万円となった。
- 2023年度に引き続き、使途指定のメニューを拡充して運用したものの、結果として「使途指定なし」の寄付が全体の9割を占めた。今後、使途指定のメニューについては見直しを進める予定である。
- 2024年10月には、開校以来初めての寄付者イベント「焚き火のつどい」を実施した。近隣企業の経営者、遠方の継続寄付者、保護者が混ざり、風越学園の現在地を共有しながら、焚き火を囲んで交流を深める機会となった。
- 活動の内容や進捗をわかりやすく伝えるため、風越づくりレポート(活動報告書)を作成し、寄付者をはじめ全保護者にも届けた。レポートには9年生へのインタビューをコンテンツとして盛り込み、学園での学びや成長の実感を伝える内容を盛り込んだ。
- また、学園のくらしを「薪」に見立てたコンセプトで風越学園HPの寄付ページのリニューアルを進め、保護者や外部のイラストレーターの協力を得て、2025年4月に公開した。

(表) 寄付金年度推移(2021～2024年度)

年度	種別	ふるさと納税 ¹³		単発寄付		継続寄付		合計金額
		件数	金額	件数	金額	件数	金額	
2021	法人	-	-	6件	13,144,000円	-	-	79,070,200円
	個人	66件	22,756,000円	10件	42,798,000円	274件	1,510,000円	
2022	法人	-	-	18件	19,000,000円	-	-	86,682,200円
	個人	50件	25,150,000円	41件	40,393,000円	348件	2,139,000円	
2023	法人	-	-	20件	14,290,000円	-	-	97,269,000円
	個人	30件	17,177,000円	26件	64,040,000円	294件	1,762,000円	
2024	法人	-	-	20件	24,040,000円 ¹⁴	-	-	153,653,563円
	個人	26件	14,170,000円 ¹⁵	19件	115,445,563円	293件	1,998,000円	

¹³ ふるさと納税は2024年12月末までの金額。また、ふるさと納税による寄付金は、計算書類上は、「補助金収入」・「市町村補助金収入」に計上される。(交付申請した金額のみ計上)

¹⁴ 法人寄付の内、受配者指定寄付金制度利用による寄付は2021年度2,110,000円、2022年度7,000,000円、2023年度3,400,000円、2024年度13,800,000円。日本私立学校振興・共済事業団に全額プールされている。

¹⁵ ふるさと納税の内、5%は町に配分されるため、実際の寄付金額は2021年度21,618,000円、2022年度23,891,000円、2023年度16,318,000円、2024年度は13,461,000円となる。

＜参考＞2024年度実績：使途別

使途	金額
教育施設・学びの環境づくり ¹⁶	812,000円
授業料等減免制度	15,980,000円
探究・プロジェクトの学び	15,000円
ライブラリーの充実	0円
スタッフの学び・はたらく環境づくり	2,785,000円
アドベンチャーカリキュラム	250,000円
森と循環する環境づくり	1,550,000円
地域・公立学校との連携・協働	0円
使途指定なし	132,261,563円
合計	153,653,563円

＜4.2 人事制度＞

＜4.2.1 採用＞

- 採用
 - 採用活動の開始時期を一月前倒したが、一次募集では採用目標を達成できず、結果的に年間を通した採用活動となった。
 - 採用応募検討者に向けて、6月にオンラインイベントを実施。現職スタッフによる学園説明会を2回、幼稚園教員への応募に関心を持ってもらうためにゲストを招いた「かぜのうわさばなし」を2回実施（1回目ゲスト：小西貴士さん、2回目ゲスト：大豆生田啓友さん）。4回のイベントで延べ200名ほどの申し込みがあり、オンラインイベントは今後も継続していきたい。
 - 教職の求職者によりひろくアプローチするために、私立学校向けの求人サイトに情報を掲載。
 - 応募者数は前年度と横ばい（前年度比+1名）であった。応募のきっかけとして求人サイト経由は確認できておらず、タレントプール登録者、学園メールマガジン登録者からの応募が占めている。
 - 採用プロセスには現職スタッフにも多くのサポートをもらい、授業づくりを候補者と一緒に行ったり、候補者の授業見学にいくなど、複数人の視点を入れながら選考を進めた。
 - フルタイムのみではなく、パートタイム勤務の方の採用ができた。
- 採用に関心のあるコミュニティへのアプローチ
 - 5月9日および16日にタレントプール登録者に対して視察研修を実施（通常の有料の研修を無料で実施）。学園の理解を深めてもらいつつ、学園としてもその後の採用応募が

¹⁶ 旧項目「軽井沢風越幼稚園（施設充実等）」を使途指定した寄付金312,000円を含む

あったときの人物理解につなげる機会とした。各回12名、計24名が参加し、9名から応募があった。

- ラーニングセンターが実施していた実践ラボの告知ルートとしては機能しており、何度か校舎にきて、子どもたちの様子をみながら現職スタッフとの学びに足を運んでくださる方とコミュニケーションを重ねることができた。
- 教員同士の学び合いに意欲がある人とつながれる機能として2025年度は活用していきたい。

<4.2.2 制度構築>

- 制度構築
 - 10月から外部パートナーとともに人財マネジメントの方向性を定めるためのディスカッションを実施
 - 2025年度の暫定対応と2026年度からの改訂の検討を進めている
- はたらく環境づくり
 - 監事による定期的な調査「安心してはたらく職場づくりアンケート」を実施し、3月には報告をスタッフに対して書面で行った。また、アンケート結果を踏まえた取り組みを25年度の事業計画に盛り込んでいる。
 - 全スタッフ向けのストレスチェックを7月に実施。産業医と連携してケアが必要なスタッフの確認を行った。
 - スクールカウンセラー1名と契約を結び、8月から学園での面談を開始した。子ども、保護者、スタッフが困りごとを相談する窓口として機能させることができている。
 - フィードバックの仕組みについては、「学びの日」にてマネジメントについて学び合いを行ったチームからの提案で2025年度から三人一組で月に一度研修日にフィードバックのやりとりを行う取り組みを実施予定。

<4.2.3 スタッフの育成>

- 研修日に実施した「学びの日」(スタッフが学びの企画を持ちより、参加する企画をスタッフ自らが選んで学び合う行う活動)では、スタッフの関心を活かした学びのテーマが設定され、実施後のアンケートでも9割のスタッフが継続を希望する時間となった。
- 研修予算の使い方について、年度はじめに「学びの日」のチームごとに予算リクエストを集め、割り振りを行った。これまで研修予算の使い方をオープンにできていなかったのも、より開かれたプロセスで活用を検討した。
- 昼間の時間帯に学び合いのためにスタッフの空き時間をつくることが実現できなかった。25年度は曜日毎のスタッフの持ちコマを可視化し、少なくとも新任スタッフのOff-JTの時間を日中に確保できるように計画する。

5. 通常事業

<5.1 募集・授業料等減免制度>

<5.1.1 募集>

- 募集対象を幼稚園は年少と年中、義務教育学校は1年生・7年生の募集を行った。
- 倍率は、幼稚園は2.6倍、義務教育学校は2.5倍となった。
- 幼稚園の昨年度比の出願数はマイナス17人となり結果として、年少は定員24名に対して16名しか合格を出せなかった。義務教育学校では、出願数はマイナス16名だったが、合格者数は前年比プラス1名の35名となった。近隣に私学の新設校が増えている影響は2023年度よりも感じるが、それほど大きくはない。むしろ、幼稚園の出願数減少の理由を認知不足と仮説を立て、2025年度は幼稚園を前面に出した広報施策を行い、2歳児クラスを開設し、募集を行う。また、途中の学年での転出により定員充足率が一向に改善しないため2025年度は募集学年を2～6年も再開することとする。
- 8月の学園説明会(オンライン)と同日の午前中の校舎見学会では、おもに7年生を対象とした体験授業の場をいくつか設けた。参加者数は少なかったものの、保護者・子どもともにカリキュラムや学園への理解度は増した手応えがあった。また、子どもによる校舎案内ツアーだけでなく、日常のように過ごしている子どもが校舎のあちこちで過ごしていたことも参加者にイメージが湧いた要因だと考える。子どもによる子どもの説明会は今回も好評だったが、申込者数が少なく広報の工夫が必要である。

(表)実施内容

	内容	日程等
広報	地域学校開放	5月23,24日の放課後 子どもも含めて運営に慣れ、同団体から5名までの上限をつけたことで落ち着いて迎えることができた
	校舎見学会・学園説明会	7月30,31日の2日間実施 校舎見学会(午前):175家庭(昨年度比-8)・665名の申込 学園説明会(午後・オンライン):202家庭(昨年度比-55)の申込
	子どもによる子どものための説明会	7月31日実施(オンライン):21家庭の申込(昨年度比-29)
選考	出願受付	9月26日～9月28日
	子ども選考	11月10日
	保護者選考	11月13,14,15日
	選考結果通知	11月22日

(表)応募者数と合格者数の推移

		2019 年度	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度	2024 年度
幼稚園	対象学年	年少、年中、年長		年少	年少、年中	年少、年中	年少、年中
	応募者数	110	151	88	73	63	46
	合格者数	48	37	20	20	23	18
	倍率	2.3	4.1	4.4	3.7	2.7	2.6

		2019 年度	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度	2024 年度
義務教育 学校	対象学年	1～7年生			1,7年生	1,6,7年生	1,7年生
	応募者数	272	280	226	119	100	84*
	合格者数	149	53	41	33	34	35
	倍率	1.8	5.3	5.5	3.6	2.9	2.5

<5.1.2 授業料等減免制度>

- 2020年度から2025年度(2024年度中に利用申請)の制度利用者の推移は次の通りである。
2024年度から「2019年4月1日時点から現在まで志願者および保護者が軽井沢町または御代田町に居住していること」という条件を撤廃したことにより、昨年度に引き続き制度利用者数は増加し、過去最多の42名となった。内訳は、昨年度からの継続が33名、在校生からの新規申請が5名、新入学者が4名である。33名が昨年度からの継続、5名が在校生からの新規申請、4名が新入学。原資をもとに申請者全員が制度を利用できるよう、審査会で議論を行った結果、16名については希望する減免額を下回る金額での採択となった。

(表)

年度	利用者数	減免率	減免額	児童生徒 人数	利用率
2020	19名(18家庭)	全額(19名)	1,710万円 (19名分の入学金・施設料を含む)	146名	13.0%
2021	26名(21家庭)	全額(26名)	1,660万円 (5名分の入学金を含む)	194名	13.4%
2022	29名(22家庭)	1/3(1名) 半額(4名) 全額(23名)	1,645万円 (4名分の入学金を含む)	228名	12.2%

2023	20名(15家庭)	1/3(1名) 半額(3名) 全額(16名)	1,085万円 (1名分の入学金を含む)	224名	8.9%
2024	37名(27家庭)	1/3(11名) 半額(8名) 全額(18名)	1,749万円 (3名分の入学金を含む)	233名	15.9%
2025	42名(32家庭)	1/3(12名) 半額(12名) 全額(18名)	1,943万円 (5名分の入学金を含む)	235名	17.9%

- 2024年度に集まった原資は、15,271,000円。内訳は、授業料等減免制度を用途としたふるさと納税(2024年1～12月)が13,461,000円(町への配分5%を差し引き済)、直接寄付(2024年度の単発・継続、受配者指定寄付金を含む)が1,810,000円。
- 2026年度以降(2025年度中に利用申請)の原資として、授業料等減免制度を用途指定した寄付金の残額は約4,130万円となっており、約2年分の運用が見込まれている。
- ただし、制度利用額が単年の寄付金額を上回る状況が続いており、現時点では十分な余裕があるとは言えない。

＜5.2 軽井沢風越ラーニングセンター＞

- 自治体との連携／プログラム開発
 - 長野県との連携協定事業の一環として「学習者中心の学びのためのスクールベースの教師教育プログラム」に、2期生(長野県研修派遣教員2名)および自己研修者1名への研修を行い、評価を通じて教師教育プログラムの改善をはかった。研究成果は、第34回日本教師教育学会にて「スクールベースの教師教育プログラムのリフレクションからみた教師の変容」として発表した。
 - また、新たに門真市との連携を結び、教員派遣(4ヶ月)の受入とプログラムの提供および年3回の教員研修を行った。全ての教員派遣に関わるプログラム受講費は260万円であった。
 - 自治体研修
 - 長野県探究推進会議に有識者として参加
 - 長野県教育委員会 探究Frontier研修支援
 - 長野県松本市立中山小学校 校内研修支援(リーディングスクール支援)
 - 長野県松本市立丸の内中学校・開智小学校・田川小学校支援(パイオニア校支援)
- スタッフ研修
 - 毎週水曜日の研修(スイゴゴ)のうち、「専門技能向上」研修の企画・運営を隔週で担当した。また個別のスタッフのニーズに応じた研修をオーダーメイドで行った。「人と組織」の研修は「学びの日」として別に設計を委ねた。
- 実践ラボ／実践研究
 - スタッフが自分の研究テーマを外部に開いて学びを研鑽するために、実践ラボを実施した。2024年度は5名のスタッフが実施し、357,480円(peatix手数料を除く)の売上となった。各回の売上の半額は実施者のスタッフに手当として還元した。
 - 「幼小のつながりを考える ～何をつないで、何を変えるのか～」(林里紗:2024年10月4日)

- 「一人ひとりの子どもごとに教材研究する」ってどういうこと？（小中）」（佐々木陽平・藤山茉優：2024年12月12日、2025年1月24日）
- 「教科横断的なプロジェクト学習の魅力と起こし方～教科を社会にひらく・接続する～」（山崎恭平：2024年10月15日）
- 「子どもの『やりたい！知りたい！』が生まれ続けるテーマプロジェクトの設計と伴走」（外館ゆき子・依田裕子：2025年1月23日・2月7日）
- 「書きたい！なりたい！やってみたい！子どもが『のびやかな書き手』になる授業づくりとは？」（片岡利允：2025年2月25日・3月7日）
- プロジェクトの学びに関わる出版
 - 『プロジェクトの学びでわたしをつくる』の増補改訂版の出版。（2,000冊制作）2024年度のバリューブックス経由の売り上げは336冊1,034,880円であった。（書店手数料なし）
- 視察・研修事業
 - 団体向けの学校案内と研修…風越学園で起きていることを触媒に、これからの学びの場を考えるきっかけとなるような場として、自治体・企業等の団体向けと個人・グループを対象に研修を実施。2024年度は、3,640,600円（19件・248人）の売上となった。

<5.3 森と循環する環境づくり>

- 森と循環する環境整備事業
 - 2022年から豆科の植物を畑で育て、土づくりを行ってきた。より持続可能な畑のあり方を目指して堆肥化するための取り組みの充実をはかった。具体的には、動物を介在した学びと糞を活用した堆肥づくりという目的に合う、馬（ポニー）の飼育を1月からスタートさせ、マイプロの時間で中学生を中心にしたグループによって、飼育を続けている。また、2022年に制作されたミミズコンポストを子どもたちが管理、活用しキッチンの生ゴミを低減することに寄与すると共に土づくりを行うことができた。
 - 継続して取り組んでいる森の日での森の整備活動と共に、幼稚園の保護者で集まり森の整備を行う、子どもたち自身で森を整備する森掃除を行うなど、取り組みをひろげた。また、森の中を走るランニングコースがつくれるなど、森での活動の可能性がひろがった1年となった。

<5.4 保護者コミュニティ>

- かぜのランチ
 - 受注管理、納入業者への発注、販売、保護者や子どもたちとのやりとりなどすべて保護者有志による運営で2021年4月から本格的にスタートした「かぜのランチ」は、地元のいくつかの飲食店に協力してもらいながら、月ごとの事前予約制で週2回（月・木）の販売を1年生以上に実施している。物価上昇に伴い一食500円から600円へと見直された。
 - 安定的に運営されており、運営・会計・当日サポートなど役割や対応内容を分担し、新しいメンバーも参加しやすい仕組みづくりを積極的に行っている。保護者同士の繋がり場のとしての価値も生まれてきているが、協力する保護者は固定化しつつある。2025年度は業務の簡素化を意識している。
- ほぼ月イチコトコトの日
 - 「人と人の関係性を豊かにする優れたツール」である美味しいものと調理という活動を通して、保護者同士が繋がりながら、1年生以上の子ども、スタッフが全校で温かい料理と一緒に食べる企画。2024年度は6回実施された。
 - 6回のうち1回はスタッフと父たちがつくる会とし、普段はあまり校舎で見かけない人も含めて20名近い父が集まった。

- うろうろ風越
 - 2024年度は「うろうろ風越」という終日授業参観を行った。
 - うろうろ風越とは、異学年の保護者が混ざり、8時半～15時までたっぷり、すべての学年の子どもの学びや休み時間の様子などを観て、それを手がかりに対話するワークショップである。
 - 子どもの姿を真ん中に置きながら、3歳～15歳の子どもの保護者同士が、じっくり・ゆったり・たっぷり・まぎって過ごすことで、風越の理解が深まるとともに、保護者のネットワークが広がる契機にもなった。
 - 2024年度は11回の開催で、合計113名の保護者が参加した。
- 裏風越
 - 「誰かのお母さん・お父さん」としてではなく、保護者同士が一人の大人としての出会う機会やつながりをつくりたいという思いから、風越学園の保護者・スタッフによる「大人が学ぶ・大人が遊ぶー裏風越」を2022年6月からスタートした。
 - 2024年4月～2025年3月の期間で22(昨年比+7)の企画が開かれ、333人(昨年比+223人)の保護者の参加があった。スタッフ発の企画も増え始め、スタッフと保護者が出会う機会にもなりつつある。
- だんだん風越
 - 2024年度は4回実施。徐々に参加する人が減っている印象があり、イベントの位置付けを再考する必要性を感じている。後半の回では、各スタッフのカリキュラムの意図や今どんなこと学びを子どもたちが経験しているのかを保護者に知ってもらう企画を折り込み、風越での子どもの育ちを大人がどんなふう考えていくのかをコミュニケーションする機会、というのは一つの方向性になるかと考えている。
 - 「信州まなび円卓会議第5回意見交換会」などの地域教育委員会との連携では、子どもがファシリテートして闊達な意見交換の場を作り上げた。
- その他
 - 日常的な学校の様子が見えにくいという声があり、Typhoonの「毎日うろうろチャンネル」を通して、日常の子どもたちや学校の様子を家庭に共有してきた。
 - 新入園入学の子どもたちと保護者を、在園在学の子どもの保護者・スタッフで迎えて交流する「かぜびらきの日」の日程を、年度末から新年度が始まる直前に変更した。新入園入学の家庭が引っ越しを終えて、落ち着いて参加できることを目指す。
 - 5・6年生や7・8年生のテーマプロジェクトを中心に、保護者と協同しながらプロジェクトを設計、実施する機会が複数事例あった。また、9年生の「そつたん(卒業探究)」では、子どもたち一人ひとりのプロジェクトへのアドバイスやメンタリング等で多くの保護者の協力を得た。
 - 5・6年生ラーニンググループでは毎週スタッフがラジオ収録をし保護者に配信、子どもの様子やスタッフがどのように考えているかを伝えるメディアとして保護者から好評だった。
 - 新入園保護者向けのプログラム「根っこが育つ、出会いの時間」を開催。12年間のスタートとなる保護者同士のつながりを育むこと、子どもが育つための大人の関わりについて共通したまなざしを育むことを目指した。

＜5.5 企業との連携＞

- 「つくる」を真ん中にした学ぶ子どもの姿、それを支える環境と関係、校舎建築と森といったリソースを活用した企業研修を実施した。2023年度から継続して受託した企業が2件、加え新規案件として大口の企業研修を1件受託した。その他、研修講師として各種講演会や企業に出向いての研修を実施した。

- 大口の案件は、半年間の日程でプログラムを実施した。そのうち風越学園に滞在した7日間と本社での研修の企画運営を担った。2025年度も受託の見込み。
- 企業研修の企画運営に掛けられる人的リソースには限りがあるが、プログラムの内容を工夫するなどして、年間に受託できる件数を増やしていきたい。

6. 運営

- 各領域において更なる定常業務の深化を行い、計画していた新プロジェクトについても概ね完了した。とりわけ今後重要となる「募集と広報」「人事制度」「寄付募集」について検討と準備を積み重ねてきたことで、2025年度の学校運営の礎を築くことができた。

<6.1 財務・会計・経理>

- スタッフが予算執行の判断を行いやすいよう、財務状況のタイムリーな共有に努め、毎月の仕訳入力をスムーズに実施した。しかし、スタッフへの情報共有に意識が向いた結果、半期決算での確認は行っていたものの、財務会計チーム内での定期的な予実確認が疎かになってしまった。2025年度は、四半期決算ごとに予実確認を行う予定。
- 電子帳簿保存法に対応した運用は滞りなく実施された。監査での帳票のやりとりも電子化されたことによって簡便化された。
- 財務分析においては、将来的な予測を立て、定員充足率の向上に向けた決断に至った。
- 特定資産引当金の引当項目と金額の見直しは、引き続きの検討事項。

<6.2 人事・労務>

- 育児休業から明けて勤務復帰するスタッフや、家族の介護をしながら勤務するスタッフが増えてきているため、家族ケアの当事者となっているスタッフのはたらく環境づくりを見直す動きが始まった。2025年度には労務担当だけではなく、関心のあるスタッフとともに課題を整理して、取り組めることからアクションをしていく予定。
- 2025年度入職のスタッフに向けて、2025年2月・3月と有志のスタッフによるオンラインでの勉強会が開かれた。入職前にお互いの顔合わせやコミュニケーションが取れた上で入職の日を迎える流れをつくった。
- そのほかは「4.2 人事制度」に記載。

<6.3 施設・設備>

- 次世代の用務員を採用し育成に注力するとともに、子どもの安心安全を最優先としながら引き続き業務の標準化・効率化を進めることができた。開校から丸5年が経ち慣れてきた面がある一方で、日々の安全点検については新たな視点を加えるなどして精度を高めていきたい。
- 光熱費の高騰に関する長期的な対策として自然エネルギーによる発電等も検討したが、大規模な導入コストがかかることからまずは支出の削減に着手していた。しかしながら冬季の総使用電力量が前年比を上回ってしまい、改めて電気・エアコン・ストーブ等の使用に際してエネルギーロスを出さないよう管理・巡視体制を整えた。

<6.4 総務・法務>

- 職場環境としては、導入5年目となり経年劣化していた複合機2台について交換し、性能を向上させ業務効率化に繋げた。また寄付のプロジェクトと連携しながら、スタッフ休憩室を設置し、保護者との協働により設備を充実させた。バックオフィスシステムについては、昨年度導入した外部システムの内製化により一元管理が進み、スタッフの利用端末・ライセンス移行をスムーズに行えた。
- 学習環境としては、開校時に一部未設置だった専科教室等へエアコンを配備した。また、「学習環境に対する寄付金」を利用し、広くニーズを集め、主に経年劣化した必要備品の交換に充当した。
- 以下の規程を新規策定、改定した。

- 就業規則(改定)
- ライフ `ラリー資料管理規程(新規策定)
- 育児・介護休業等に関する規程(改定)
- 文書保存規程(改定)

＜6.5 校務＞

- 子どもの情報共有に関わるTyphoon機能の拡充と実装にあたっての運用を整備した。
 - 子どもの基本情報と健康に関する情報を一覧できる「環境記録」の機能が追加された。通学路の登録や顔写真の表示など、基本情報として必須項目を一覧できるようにシステム会社との開発を進め、実装に至った。
 - 保健項目の改善により、業務効率化が進んだ。運用面では、アレルギー調査票など安全に直結する項目についてはアンケート回収スケジュールを見直し、より円滑な情報収集実施に努めたい。
- 校務分掌を整理し、スタッフの仕事量の見える化を進めた。ラーニンググループ間を結ぶ情報共有の場においては、短期～中期的な見通しを持ち、かざこしミーティングやアウトプットデイ等のイレギュラー時程に対して円滑なサポート・運営ができた。

＜6.6 広報＞

- 2025年3月末時点で618本のかぜの一と記事がWeb上に公開されており、2023年度に新しく増えた記事は45本(昨年比-27)だった。2024年3月のメールマガジンは4,598人(昨年比+115)。
- 公開される記事の質は担保されているものの、年度後半は特に記事執筆数が減少傾向にある。2025年度8月以降はメールマガジンの発行は終了し、地域向けや卒業生とのつながりづくりの意味も含めてInstagramでの発信を始めている。

＜6.7 情報システム＞

- デジタルシチズンシップに関する外部専門家を招聘し、スタッフに向け研修を年間2回開催した。そのほか新入職スタッフ向けの学園内ツールの利用に関する研修を実施した。
- 子どものデバイス環境変更を行い、7・8・9年生のBYOD化を円滑に行うことができた。一方で、5・6年生の端末の貸出体制については、実運用から様々な課題が見えた。特にハード面において、在籍数の増加に伴い学年の半数しか使用できない現状はカリキュラムの幅を狭めてしまう恐れがあった。そのため、2025年度に向けて30台の追加購入を決定し、5・6年生全員が利用できる体制整備を進めた。ソフト面では、新たな使用方法(ホワイトリスト運用)を3学期に試験的に導入し、次年度の本利用に向けた検討課題を抽出した。
- 対スタッフについては、ナレッジ蓄積のため利用するツールを整理し、最も利用頻度の高いslackの機能を最大限活用してポータル機能などを集約した。各個人が把握していたTIPSを抽出してマニュアル化し、校務・事務手続きに関するリソース削減に寄与できた。

＜6.8 渉外＞

- 2歳児親子向け保育などの地域向け子育てイベントを新たに開催したことにより、補助金の加算に繋げることができた。今後も継続していく予定。
- 寄付募集の強化に向けて準備が整ったこともあり、2025年度はいよいよ本格的に企業とのパートナーシップ等に注力していく。

以上

参考資料

<大切にしたいこと>

子どもも大人も、つくり手である

軽井沢風越学園は、子どもも大人も「つくる」経験を、じっくり、ゆったり、たっぷり、まざって積み重ねていきます。

本気で手間をかけて「つくる」ことに没頭し、ときには不安や不安定さを味わいながら「つくる」ことに挑戦していきます。

私たちは子どもこそがつくり手であることを信じています。

ここでいう「つくる」は物理的なものや学習の成果物だけにとどまりません。安全・安心な場を自分たちでつくる、学びをつくる、自分たちの学校をつくる、コミュニティをつくる、仕組みをつくる、ルールをつくる、自分をつくる。つまり、「わたし(たち)の未来をわたし(たち)でつくる」冒険をするのです。

子どもたち、スタッフ、保護者、地域の方々など、軽井沢風越学園では誰もががつくり手です。

「つくる」ことを通じて、「自由に生きる」ということと「自由を相互に承認する」ということを繰り返し試していきます。そうすることで、1人ひとりが幸せになり、幸せな社会をつくっていくのです。

「 」になる。

自分が将来どんな＜私＞になるか、どんな＜私＞になりたいか、あらかじめ知っている子どもはいません。他者との関係の中で、たくさんの「つくる」経験を試し、失敗と成功を積み重ねた結果として、私らしい私の輪郭が築かれていきます。

軽井沢風越学園で、じっくり、ゆったり、たっぷり、まざって過ごした子どもたちは、結果的に様々な「 」になる。軽井沢風越学園で、じっくり、ゆったり、たっぷり、まざって過ごした子どもたちは、「 」にどんな願いを込め、どんな「 」になっていくのでしょうか。それを決めるのは、子どもたち自身です。

もともと備わっている自分らしさを大切にしながら、よりよくあろうとする子どもたち同士が共に試行錯誤し、影響し合うことで、自分一人ではたどり着けない世界が拓かれるための学校であり、スタッフでありたいと考えます。

大人も学び続ける

軽井沢風越学園におけるスタッフや保護者など大人は、どのような存在なのでしょう。スタッフたちはそれぞれの現場で実践し続けてきましたが、まだ明確な答えを見出しているわけではありません。

ひとつだけはっきりと言えることは、大人も学び続ける存在でありたいということです。学校づくりはずっと続いていくプロセスです。常に「本当にこれでいいのかな」と前提を問い直し、変態し続けること。そのための手間を惜しまないこと。なにより学ぶことや変わることをおもしろがっていること。

私たちは、これから集う多くの仲間と子どもたちと共に、試行錯誤し、「よりよくあろう」とし続けていきます。

<法人概要>

法人名	学校法人軽井沢風越学園
-----	-------------

設置校	軽井沢風越幼稚園(幼稚園) 軽井沢風越学園(義務教育学校)
所在地	〒389-0113 長野県北佐久郡軽井沢町大字笈地1278-16
理事	本城慎之介(理事長) / 岩瀬直樹(校長) / 遠藤綾(園長) 佐々木知範(事務局長) / 団遊 / 紅谷浩之 / 松平誠 / 山崎繭加
監事	丸田由香里 / 弓場法
評議員	青木将幸 / 荒井英治郎 / 今井悠介 / 大野暉 / 大豆生田啓友 佐々木陽平 / 菅谷貴子 / 杉浦紘子 / 土屋芳春 / 西村明子 原田英治 / 宮城治男 / (岩瀬直樹) / (遠藤綾) / (佐々木知範) / (紅谷浩之) / (山崎繭加)

(2025年3月31日現在)

<教職員組織>

全体 60名	法人 (12名)	正職員 有期契約職員 業務委託 その他	4名 4名 3名 1名
	幼稚園・義務教育学校 (46名)	正職員 有期契約職員 パートタイマー職員 業務委託	26名 9名 7名 4名
	自治体派遣 (2名)	長野県教育委員会	2名

(2025年3月31日現在)

<在籍数>

	学年	定員	在籍	充足率
幼稚園	年少	24	19	79.2%
	年中	24	20	83.3%
	年長	24	21	87.5%
	小計	72	60	83.3%
義務教育学校	1年	35	28	80.0%
	2年	35	26	74.3%
	3年	35	27	77.1%
	4年	35	28	80.0%
	5年	35	28	80.0%
	6年	35	22	62.9%
	7年	35	26	74.3%
	8年	35	19	54.3%
	9年	35	25	71.4%
	小計	315	229	72.7%
	合計	387	289	74.7%

(2025年3月31日現在)

<在籍数の推移>

在籍数と充足率の推移

		2020年度		2021年度		2022年度		2023年度		2024年度	
		4月1日	3月31日	4月1日	3月31日	4月1日	3月31日	4月1日	3月31日	4月1日	3月31日
幼稚園 定員:72	在籍数	48	48	69	64	63	59	59	59	61	60
	充足率	66.7%	66.7%	95.8%	88.9%	87.5%	81.9%	81.9%	81.9%	84.7%	83.3%
義務教育 学校 定員:315	在籍数	146	144	194	187	228	221	224	219	233	229
	充足率	46.3%	45.7%	61.6%	59.4%	72.4%	70.2%	71.1%	69.5%	74.0%	72.7%
合計 定員:387	在籍数	194	192	263	251	291	280	283	278	293	288
	充足率	50.1%	49.6%	68.0%	64.9%	75.2%	72.4%	73.1%	71.8%	75.7%	74.4%

転退出状況の推移

		2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
保護者の転勤・転職や 就労状況変化	幼稚園	0	5	2	0	0
	義務教育学校	0	4	0	0	3
健康上の理由	幼稚園	0	0	1	0	0
	義務教育学校	0	0	0	0	0
海外留学	幼稚園	0	0	0	0	0
	義務教育学校	0	0	1	1	0
学習環境の変化を求めて	幼稚園	0	0	1	0	1
	義務教育学校	2	3	6	6	3
その他	幼稚園	0	0	0	0	0
	義務教育学校	0	0	0	0	0
計		2	12	11	7	7

<施設>

構造	S造 階数2
敷地面積	約69,742.68㎡
建築面積	約 5,322.74㎡
延床面積	約 6,771.52㎡
設計・管理	株式会社環境デザイン研究所
施工	北野建設株式会社
工期	2018年11月2日～2020年2月19日

